を行っています。もちろん、それで翌日から判断力が飛躍的に高まるものではなく、研修を受けた本人が、次はこれをやってみようと自己啓発を続けていくことが大切です。教育とは、学ぶ側の主体的な努力がなければ、効果は半分以下になるもの。『論語』に、「学びて思わざれば、則ちくらし。思いて学ばざれば、則ちあやうし」という格言がありますが、学んでも自分で考えなかったら、知識だけの世界なのであまり役には立ちません。一方で、自分で考えるだけで学ぼうとしないのは、独断に陥り大変に危険です。21世紀のグローバル化した世界では、まさしくこの言葉があてはまります。したがって、みなさんがどれだけ深く学んだか、それを自分なりにどれだけ考えたかということが重要でしょう。

ただ、外国のことは本よりも現地に行ったほうが、はるかに多くのことが学べると思います。私は尾鷲高校出身ですが、世界史の先生がおっしゃった「尾鷲湾はテムズ河に通じる」という言葉が今でも記憶に残っています。最近、若い人たちは旅行をしないようですが、やはり、自分の世界に閉じこもらず、自分の目で見て、耳で聞き、体験をすることは、ふだんの学習にも役立つと思います。また、世界の人々とコミュニケーションするために、ぜひ外国語を勉強してください。企業では英語はもちろんですが、さらに第2外国語が求められる時代がもうそこまで来ています。外国語を修得すると、日本語の良さもあいまいさもよくわかり、他国との考え方の違いもわかってきます。ゲーテは、「外国語を知らぬ人は、母国語をも知らぬ」という言葉を残していますが、外国語を学ぶことは、それほどに利点があるということです。

「実心」「実言」「実行」を座右の銘として生きる

言葉に関してもう一つ申し上げると、欧米と東洋では、言葉に対する感覚の違いがあります。欧米の場合、聖書に「はじめに言葉ありき」という一節が出てくるように、言葉が心理や真実を伝達し、しかも相手を説得するための唯一のツールであるという定義づけがされてきました。だからこそ、いかに言葉を使って相手を説得するか、自分の主張をするかという側面が発達してきました。一方、東洋では相手を説得することはそれほど重要な意味を持たず、言葉があいまいに使われてきたように思います。典型的な例は、嘘に対する感覚です。言葉が社会システムの基本となっている欧米では、嘘をつくと厳しくとがめられますが、東洋には「嘘も方便」という考え方があり、これまでこうした風土をなくそうという努力もされてきませんでした。いま、企業コンプライアンスが強く言われるようになっていますが、私は全員でこういう風土をなくしていかないと、いつまでたっても改善しないと感じています。それには言葉が重要です。言葉を使っていろいろなことを認識し、言葉を使って自分の考えをまとめ、言葉を使って相手に正しく伝えることが大切ではないでしょうか。私は座右の銘として「実心・実言・実行」を掲げています。「実心」、本当に心で思っていることを、「実言」、正しい言葉で表現し、「実行」、表現したことは責任をもって実行するという意味です。これも訓練ですから、みなさんにも大学時代からずっとやっていただきたいと思います。いろいろ申しあげましたが、グローバリゼーションのなかでは判断力が重要です。それを身につけるためには本を読み、世界を見聞きし、自分で広く深く考えてみること。これを繰り返し、しかも相手の立場から考えてみることで、最適な判断ができる力は伸びていきます。そういったことを若いみなさんにはぜひ心に留めていただいて、大学生活や人生に役立てていただければうれしく思います。

内田淳正学長のあいさつに始まった講演会。会長の実体験に裏づけされたお話は、会場に集まった学生たちを奮起させるものでした。講演後は、会長の夢や日本企業のグローバリゼーションなどについて次々に質問が寄せられ、盛況のうちに終了しました。

三重大学特別講演会
「グローバリゼーションと日本」
～若き世代の柔軟な知力、豊かな構想力、そしてエネルギッシュな行動力に期待～
株式会社 東芝　取締役会長　西田 厚聰

日時：2011年6月10日
会場：三重大学講堂（三翠ホール・大ホール）
司会：武田保雄理事・副学長（統括・研究担当）

三重大学生活協同組合創立40周年記念
C.W.ニコル講演会

人と自然との共生を語る

作家、環境保護活動家、探検家
C.W.ニコル　C.W. Nicol

C.W.ニコル　講演会

2011年7月9日、三重大学では作家・探検家・環境保護活動家としても活躍するC.W.ニコル氏をお迎えし、講演会を開催しました。ニコル氏から、少年時代の夢や日本の自然のすばらしさ、仲間と取り組む森づくりの様子が熱く語られ、あらためて人と自然との共生を考えるひとときとなりました。

日本の自然は美しく 生命が満ちあふれていた

幼い頃から自然が大好きだった僕が、探検家を目指すきっかけとなったのは、北極探検家のドキュメンタリー映画でした。そこに映し出されるイヌイットの生活に感銘を受け、いつか北極に行こうと勉強したり、からだを鍛えたりと、12歳の頃から準備をしていたんです。チャンスが訪れたのは17歳のとき。学校の先生のアシスタントとして初めて北極へ行き、憧れの人々、イヌイットと何カ月も過ごすことができました。このときは、将来、北極に住むことになるのだろうと思っていたんですが、柔道を習っていて、日本の文化にも興味があったんです。それで、一度は行ってみたいと、初めて日本を訪れたのは約50年前のことです。

最初に日本の山を見たときは感動しました。私が子どもの頃、故郷のウェールズは森の面積が国土の5%程でしたが、日本は7割近い。その上、山には熊がいます。英国で熊が絶滅したのは、1000年近く前。現代の日本に熊がいるというのは、自然がとても豊かという証拠です。生物多様性がヨーロッパのどの国よりも富み、北に流氷、南にサンゴ礁がある。そんな自然を知るにつれ、私は日本が大好きになり、ついには永住することになりました。

人間の努力によって 自然は必ず戻ってくる

しかし、長野県黒姫に住み始めたころ、仲間の漁師とともに山に入ったら、随分と森の様子が変わっていました。当時はバブル。開発のためにどんどん原生林が伐採され、郊外の里山は放置されて藪になっていました。里山のような場所は、人間が手を入れないとダメになります。悲しくて何度も声をあげましたが、開発の勢いは止まらず、どうしていいかわかりませんでした。

そんなとき、故郷のウェールズでヒントを見つけたんです。炭鉱開発によってハゲ山になっていた土地が、人が努力して手を入れることで、緑豊かな森へ変わっていました。森がきれいになったら、川もよみがえり、鮭が上るようになっていました。そして、5%だった森の面積が、今は60%に増えています。この様子を見て、僕は何とか自分の手で黒姫の森をきれいにしたいと、放置されていた土地を少しずつ買い、賛同してくれる仲間とともに26年前に森づくりを始めたんです。

今、私たちの森には絶滅危惧種が戻り、熊もムササビも、たくさんの動物たちが住んでいます。山菜や薬草の種類も増えました。植えたのではありません。場所さえ整えれば、自然は戻ってくるんです。人間は壊すこともできるけど、やり直すこともできる。それを、ぜひ忘れないでいただきたいと思います。

場所さえ整えれば、自然は戻ってくる。
壊すこともできるけど、
やり直すこともできるのが、人間なのです。

REPORT 2

C.W.ニコル
C.W. Nicol

作家、環境保護活動家、探検家。1940年、英国・ウェールズ生まれ。カナダ水産調査局の技官として何度も北極地域の調査探検を行ったほか、世界各地で環境保護活動を展開。1980年、長野県に移住。1986年より、荒れ果てた里山を「アファンの森」と名づけ再生活動を始める。1995年、日本国籍取得。2005年、英国エリザベス女王陛下より名誉大英勲章を賜る。現在、(財)C.W.ニコル・アファンの森財団理事長。

鼎談　C.W.ニコル氏 + 鈴木英敬三重県知事 + 内田淳正学長

司会：朴 恵淑理事・副学長

C.W.ニコル氏の講演会に引き続いて、朴恵淑理事の司会のもと、ニコル氏、鈴木英敬三重県知事、内田淳正学長による鼎談が行われました。環境保護への取り組みやふだんは聞けない3者の夢が語られ、市民や学生からも活発に質問が寄せられるなど、和やかな雰囲気のなか鼎談は終了しました。

生きることを見つめ 自然との共生を進める

朴　ここからは自然との共生や夢について、みなさんにお話をうかがいたいと思います。ニコルさんの「アファンの森」は、今年、「プロジェクト未来遺産」(※1)に選ばれました。自然への情熱には感銘を受けるばかりですが、その少年のような心の原点はどこにあるのでしょうか?

ニコル　僕は小さい頃から森に入って、いろいろなものを観察するのが好きでした。小さな昆虫を見つけると「この虫は1日しか命がないけど、頑張っているなぁ」と思ったり、大きな木を見て「この木は僕が死んだ後も100年、200年と生きていくのか」と考えたり。次第に、いろんな人生、いろんな生命のサイクルがあって、今この惑星に一緒にいられること、生きていることが奇跡だと思うようになりました。

朴　その気持ちが、環境保護に取り組まれるニコルさんの原動力となっているのですね。では、三重県や三重大学の環境保護の取り組み状況はいかがでしょう。

鈴木　三重県では地球温暖化防止、CO_2排出削減の進め方について計画を策定中です。東日本大震災によって、生きるということを見直さなければならないときがきました。スーパーの24時間営業や夜間の照明などが本当に必要なのか、あらためて生きる

ことを考え、施策を練り直そうとしています。一方で三重県には、すばらしい森林と海があります。県庁が毎年行っている1万人アンケートで、三重県の好きなところの第1位は自然。これをみんなで守っていこうと、志摩市では里海事業を展開していますし、里山

については、「美(うま)し国おこし・三重」(※2)のなかで、各地域で里山を守っていただく人々をパートナーグループとし、活動を支援しています。また、四日市公害を乗り越えてきた三重県の技術を海外へ移転する活動も展開しています。

内田　私は学長就任時、世界一の環境先進大学を三重大学の目標に掲げました。本学では早くから学生のみなさんが中心となって、3R(リデュース・リユース・リサイクル)運動を進めていましたが、それをさらに発展させるためには強いメッセージが必要と考えたわけです。そのなかで、2020年までに1990年比でCO_2排出量を30%削減するカーボンフリー(※3)大学構想やスマートキャンパス構想というものを打ち出しました。今、スマートコミュニティ(※4)が叫ばれていますが、まだ一般の方にはわかりにくいので、まず大学のキャンパスで効率的なエネルギーのマネジメントシステムや省エネの取り組みを実現し、それを地域のみなさんに見ていただいて津市、三重県、ひいては日本全国に広がっていくモデルになればと考えています。昨年は、日本環境経営大賞(※5)の最優秀賞、パール大賞をいただき、エコ大学ランキング(※6)日本一の評価も受けました。今後も、さらに高い目標に向かって進んでいきたいと思います。

環境で世界をリードする三重を、日本を夢見て

朴　では、みなさんの今後の夢についてうかがえますか。小さい頃の夢もお願いします。

ニコル　幼い頃は北極探検家になることと黒帯を取ることが夢でした。今後は、国有林の森づくりが進んで、100年後、日本中に健康で美しい森が増え、川が健康に戻って、日本がアジアのエデンの園になることを夢見ています。

鈴木　僕はチェロを習っていたので、子どもの頃は音楽で生計を立てたいと思ったこともあります。今の夢は知事として、この三重県を存在感のある地域にすることです。ただ有名というのではなく、自然や環境などについて世界から正しいことをしっかりやっていると、認められるような地域にしたいと思います。また、「三重の人はみんな夢を持っているね」「三重県には夢があるね」と、訪れた方から言われたいです。

鈴木英敬　すずきえいけい

三重県知事
東京大学経済学部卒業
経済産業省職員、自由民主党三重県第二選挙区支部長を経て、2011年4月より現職。

内田　私の場合、当時の子どもなら誰もが憧れたプロ野球選手になりたいと思ったり、絵描きになりたいと思ったこともありました。学長としての夢は、やはり世界一の環境先進大学として本学が認められるようになることです。

若い人たちに伝えたい熱い思いと実践の大切さ

朴　今日は会場に学生たちが集まっていますので、最後にメッセージをお願いします。

鈴木　学生のみなさんには、まず、何でもいいので目の前のことに夢中になってほしいと思います。頑張らないことがカッコいいと思っているかもしれませんが、頑張っている人の姿を見ることで、人は感動するし勇気や希望を持ちます。社会に出たらやりたい仕事ばかりではないでしょう。でも、それに夢中になって取り組めば、だんだん好きになり、上達もしていきます。まじめで素直で、一生懸命で超積極的。それが僕は大切だと思っています。もう一つは、人の役に立つ喜びが、実は自分の幸せにつながってくることを知ってほしい。家族のため、地域のため、里山のため、どんなことでもいい。人の役に立つ喜びをかみしめて、もっともっと幸せになってくれたらいいなと思います。

内田淳正　うちだあつまさ

学長　医学博士
専門分野は、整形外科学

ニコル　私は12歳から夢を追い続けてきました。どうしたら夢を叶えられるのかと聞かれますが、それは簡単です。やりたいな、できればいいなではなく、「僕がやる」と思うことです。心が先に行ったら、からだはついてくる。本当に今までそういうことの繰り返しで、自分の夢を叶えてきました。もし今、あなたに自分の夢がないとしても大丈夫。人の夢を応援したら、それが自分の夢になります。毎日を楽しく生きましょう。

朴 恵淑　ぱくけいしゅく

理事・副学長(環境・国際担当)
専門分野は、環境地理学・環境教育・NGO論
三重大学の環境教育を牽引し、環境ISO認証取得に尽力。
国内外の環境関連の要職を歴任。

内田　本学の教育目標は、「感じる力、考える力、コミュニケーション力、それらを総合した生きる力を養成する」です。社会に出ていかに生きるか、それを学ぶために知識だけではなく、ニコルさんも実践してこられたフィールドワークを大切にして、自分の生きる力を高めてください。本学にはいくらでも実践の場があります。自ら率先して多くの実践を経験することが、いかに生きるべきかと同時に、危機を回避し前に進むための指針となるはずです。

朴　今日は3名の方から、中身の濃いお話を聞かせていただきました。スマートキャンパス、スマートコミュニティを考えるいい機会にもなり、さらに議論を深めていければと思います。本日は本当にありがとうございました。

(※1)プロジェクト未来遺産
未来に伝えたい地域の文化・自然遺産を守る市民の活動を応援する(社)日本ユネスコ協会連盟の取り組み。

(※2)美(うま)し国おこし・三重
「『文化力』を生かした自立・持続可能な地域づくり」を目指す三重県の取り組み。2009年から2014年までの期間に、多彩な催しを展開することにより、地域の魅力や価値を向上させ、発信するとともに、集客交流の拡大をはかり、自立・持続可能な地域づくりへとつなげていくことを目標とする。

(※3)カーボンフリー
CO_2を排出する活動をした際に、その排出量を計算し、それに見合ったCO_2削減活動に投資や寄付することで排出したCO_2を相殺すること。

(※4)スマートコミュニティ
再生可能エネルギー(太陽光、水力、風力、地熱など)や最新IT技術、省電力機器を複合的に組み合わせた街づくりのこと。

(※5)日本環境経営大賞
全国の企業(事業所)、NPO、学校、病院などあらゆる組織の環境経営の取り組みのなかから、その"さきがけ"となるものや優れた成果をあげているものを表彰する三重県の制度。大学が最高賞であるパール大賞を受賞するのは初。

(※6)エコ大学ランキング
全国の大学のCO_2排出状況、地球温暖化対策、環境教育支援、学生との活動連携の調査を行い、その結果を集計してポイントの高い大学を表彰する制度。

三重大学生活協同組合創立40周年記念
C.W.ニコル講演会
人と自然との共生を語る

日時:2011年7月9日
会場:三重大学講堂(三翠ホール・大ホール)